

私の指導法

2015年5月15日(金)

リーガロイヤルホテル東京 吉村正

◎資料説明

1. なぜソフトボール部監督が講師か

2. ソフトボール部とは (その1)

[歴史] ①昭和40(1965)年 ソフトボール同好会創設

②平成元(1989)年 ソフトボール部に昇格

[現状] ①部員

②施設

③補助金

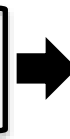
④リクルート

[目標] ①「世界一」

②「人間教育・人間形成」

進取の精神

人間の総合力



・19回の海外遠征

・11冊の記念誌

特徴的な教え子

3. 世界のソフトボール

①アメリカは国技の一つ

②世界

③日本

4. ソフトボール部とは (その2)

[40年間勝てず]

① 24年間 同好会

「日本一」目指したが

② 部16年

インカレ準優勝が2回のみ

[この10年間]

5. 私の指導法

① 特徴的指導法

② 一般的指導法

12点

- ・ソフトボールを心底好きになること
- ・選手をよく知り信頼しあうこと
- ・施設や用具を大切にすること
- ・ソフトボールが上手であること、上手になろうとすること
- ・チームの目標と特徴を把握すること
- ・指導法に柔軟性を持つこと
- ・しっかり丁寧に教えること
- ・情熱と優しさを大切にすること
- ・選手の扱いは公平にすること
- ・ほめること、叱るときは冷静であること
- ・必要に応じてコーチを起用すること
- ・実績を上げたら、より謙虚になること

◎むすびに

〔健康教育とソフトボール〕

「日本式ティーボール」を創設・完成させた 38年間の研究と実践の成果
(早稲田大学の学生とともに)

- ① 国民皆ベースボール」に向けて
- ② 日本式ティーボール」を日本からアジアへ そして世界へ
- ③ 2024年のオリンピックは米国で開催する運動を

これからの10年間で「日本式ティーボール」を通じて、野球・ソフトボールの加盟国を200カ国以上に！

これからの活動の中心が「早稲田大学ソフトボール部」であり続けたい。

資料① 早稲田大学ソフトボール部男子部 部員データ

入試割合

スポーツ推薦	4名
自己推薦	3名
付属校・係属校推薦	6名
指定校推薦	3名
センター競技歴入試	4名
留学生	1名
一般入学試験	12名

現役・浪人 割合

現役	20名
浪人	12名
留学生	1名

競技経験 割合

野球	15名
ソフトボール	18名

男子部 全33名 (4年8名 3年8名 2年10名 1年7名)

資料② 世界のソフトボール

世界野球ソフトボール連盟 加盟国・地域

	ソフトボール	野球
アジア	20	23
アメリカ大陸	33	32
ヨーロッパ	39	42
アフリカ	19	17
オセアニア	13	14
	計 124	計 128

出典 World Baseball Softball Confederation

アメリカと日本の比較

	登録チーム数	登録選手数
アメリカソフトボール協会 (ASA)	23万	300万人
日本ソフトボール協会 (JSA)	1万280	13万900人

出典 ASA ホームページ JSAホームページ

資料③ 早稲田大学ソフトボール部 過去10年の戦績 (記録)

- ・2005年 第40回全日本大学選手権 (男子) 優勝 ワールドシリーズ (AAの部) 優勝
- ・2006年 第41回全日本大学選手権 (女子) 優勝
- ・2010年 ワールドシリーズ (U23の部) 優勝
(2011年 大嶋匠 プロ野球 (北海道日本ハムファイターズ) へ)
- ・2012年 第47回全日本大学選手権 (男子) 優勝
- ・2013年 第48回全日本大学選手権 (男子) 優勝
(2013年 吉村正 NAF A (北米ファーストピッチ・ソフトボール協会) 殿堂入り・北米以外では初)
- ・2014年 第49回全日本大学選手権 (男子) 優勝 ワールドシリーズ (U23の部) 準優勝
(3連覇中)
- ・2009年～2013年 東日本大学選手権 (男子) 優勝 (5連覇)

(その他の特徴)

※ハワイ全島大会において 3回優勝 3回準優勝

※米国遠征 計19回 (男子部16回 女子部3回)

※ソフトボール部史 12冊発行

大学から頂いているお金に関して (2014年度)

補助金 ・ ・ ・ 54万5000円
体育各部強化計画費 ・ ・ ・ 30万円
個人強化計画比 ・ ・ ・ 160万円
計 244万5000円

(OB・OG会寄付金 ・ ・ ・ 90万円)

日本ソフトボール協会

登録チーム数 ・ ・ ・ 1万280チーム
登録選手数 ・ ・ ・ 13万900人

高校ソフトボールチーム数 (2007年)

女子 ・ ・ ・ 1486
男子 ・ ・ ・ 309

稲門会講演会 「私の指導法」

2015年5月15日（金）

リーガロイヤルホテル東京

吉村正

（仙北谷さん）バレーボール部OBの仙北谷と申します。よろしくお願いたします。今年の講演会は5回目になりますが、今回はソフトボール部OBの吉村正監督をお招きいたしました。吉村さんは京都の平安高等学校のご出身で、昭和44年に教育学部を卒業されまして、現在は人間科学学術院健康福祉科学科の教授でございます。そして男子と女子の監督をされています。現在、男子は全日本大学選手権3連覇中でございます。また、吉村さんは昭和40年4月に早稲田に入学されまして、すぐに仲間を募ってソフトボール同好会を立ち上げられました。平成元年、1989年に部として承認されました。同好会が24年、部として26年、合わせて今年で51年目になりました。また、吉村さんは団長兼監督として早稲田の学生を帯同しまして、アメリカに男子16回、女子3回遠征されています。また、ご自身がかつて選手としてハワイの野球、ソフトボールリーグで活躍されたことなどが評価されまして平成5年、2013年にNAFA北米ファーストピッチソフトボール協会の殿堂入りをされました。これは野球でいうところのメジャーリーグにあたるということでございます。アジアで初めて、また白人以外で初めてということでございます。ご紹介が長くなりましたけれども、それでは吉村さんお願いいたします。

（吉村先生）皆さん、こんにちは。今日はこのような素晴らしい機会をお与えいただきまして大変ありがとうございます。心から感謝しております。41番目の部で伝統も何もないですけども、このような素晴らしい機会を与えていただいたことを誠に光栄に思っております。ありがとうございます。今、仙北谷さんから過分な紹介を頂きました。今日は男子インカレ3連覇中とGPA。GPAといっても皆さんあまりご存じじゃないかもしれないですけども、成績優秀者のことでしょうかね。成績優秀者が卒業生で4名もいたということです。文武両道のチームだから、そのソフト部の監督だということになったという風にお聞きしております。文武両道で活躍してくれた学生諸君には心から感謝したいと思っております。それでは最初に、皆さん方の茶封筒に3種類の資料がありますので簡単にその資料の説明をさせていただきます。これは茶封筒の裏にありますように早稲田大学ソフトボール部現役の連中とOBの皆さんから今日出席の皆さんへのプレゼントです。まず最初に、A3のこの4枚のものをご覧ください。1枚目が今日の講演の流れです。ソフトボールの現状、ソフトボールの目標、特徴的な活動、ソフトボール50年、本題の「私の指導法」、で「最後に将来にむけて」という流れで1時間ほどお話しさせていただきます。こうと思います。次ページ、2枚目をご覧ください。ポイントとなるところはこのように図等で示してみました。まず資料1の部員データのところでですけども、理事でおられます齋藤部長先生を筆頭に男子が34名、女子が26名です。男子部で非常に特徴的なのは、浪人が13名、現役が20名ということです。推薦組があまりいないものですから、浪人生を鍛えるという喜び、大変さを味わわせていただいております。資料2の世界のソフトボールというところについてです。ソフトボールはアメリカの国技です。パス

ケットボールやバレーボールが出来る約10年前にアメリカで誕生しました。現在では1億2000万人の競技人口とファンがいると、アメリカの百科事典には示されています。登録してないチームは、もう大変多くあるのですが、登録チームはASA(アマチュア・ソフトボール・アソシエーション)で23万チーム、登録選手数は300万人ということです。ちなみに日本のジャパン・ソフトボール・アソシエーションは、1万チーム、登録選手数は13万人です。日本でもソフトボールは非常に普及しているのですが、アメリカでは桁外れに普及しているということをまずご理解ください。アメリカのベースボール人口の10倍、ソフトボール人口があります。そういうところで資料3、私がグラウンドに戻ったのが10年前なのですが、過去10年間でワールドシリーズを2回優勝させていただいて、ワールドシリーズ準優勝が1回、インカレはというと、この10年間で女子を含めて5回優勝させておられます。部長先生をはじめ、チームドクター、選手たちといスクラムを組めてこういう成績を残させてもらったのかなと思っておられます。ワールドシリーズというのはどういうものかといいますと、野球と同じです。野球も、アメリカンリーグとナショナルリーグで優勝した者同士が戦います。例えば、ニューヨークヤンキースとロサンゼルスジャースなど、いわば都市対抗ですね。アメリカ北米で優勝したチームを世界一と呼んでいます。というのは、アメリカ以外の他の国はあまりにも弱すぎるのです。ですから、メジャーリーグのようにアメリカ北米で優勝したチームを世界一としています。そういうところに早稲田が行かせていただいております。ではなぜ行けるのかということなのですが、先ほど紹介にありました通り、私は早稲田大学を卒業した後2年半ほど、ハワイの大学に留学いたしました。そこで、350ゲームほど野球・ソフトボールをプレーしておりました。その14年後、39歳の時にハワイ大学の客員教授に戻らせていただいて、野球部のコーチやソフトボール部のコーチをやらせていただきました。ですから、吉村さんが連れてくるチームであれば、ハワイの大会に出させてやるという信用を得たものですから、ハワイの全島大会に出させていただいて、早稲田大学はハワイ州代表としてワールドシリーズに出ているというわけです。読売ジャイアンツがアメリカのワールドシリーズに出られないのは、日本の代表であるからです。そういうことで、男子のソフトボール部を16回アメリカに連れて行って、そのうちの10回はハワイの予選会に出場して、そのうちの3回優勝、3回準優勝しました。ワールドシリーズというと、ソフトボールの場合は300チームから400チーム集まってきます。そしていろいろなデビジョンがあります。そこで優勝した時のキャプテンの井くんが今日来ておりますけれど、優勝することは大変な戦いでもあります。1点でも取られたら負けてしまうような戦いです。向こうはメジャーリーグOBの選手がいるわけですから、どう0点に抑えるかというところに早稲田は取り組んでおりました。U-23になると、レベルが低くなるわけですが、U-23で優勝を1回、準優勝を1回とっています。ワールドシリーズの最初の3回の優勝は、世界を、アメリカを、カナダを驚かせた大きな出来事でした。次の資料4、右上なのですけれども、この講演で男子インカレ3連覇が評価されておりますが、まず右下、アメリカのソフトボール場は花びら式といって、4面必ずあってその隣に2面があります。このようなものがオールオーバーあちこちにあります。その上に太いラインがあります。

その太いラインの左上をご覧ください。決勝11-0 VS神戸学院大学5回コールド。これが3年前の4年生の最後の試合です。インカレで、5回コールドで勝っております。ソフトボールは7回までです。そして2年前の決勝8-0 VS同志社大学5回コールド。圧勝です。次に去年、決勝13-6 VS環太平洋

洋大学5回コールド。これほど強いチームを作らせていただきました。それでは、左上、3年前2011年から2012年というところをご覧ください。小さい字で申し訳ないですが、新チームの9月10月はどうだったかというところ、実は2勝3敗からのスタートなのです。学習院大に負け、国士館大に負け、日体大に負ける。ここからのスタートでした。浪人が多いですから、なかなか最初からいいチームが作れない。そして、1ヶ月後の11月に準優勝をしてひと冬越えて春のリーグ戦で全勝優勝をして東日本大学選手権は4連覇、全部コールドで勝って一気にインカレに臨んで先程も言ったように決勝で神戸学院大学に対して11-0で勝たせて頂いたというのが3年前です。2年前も新チームを作った時、9月は準優勝からです。それでも日本体育大学に0-2で負けています。優勝ではありません。その1ヶ月後の11月の関東大学選手権では優勝させて頂いています。この年は非常に強かった、というのも4年生エースを3名作りましたものからです、後でどういうエースを作ったのかは説明しますけれども、その3名を自由に使いこなして圧勝でした。春もこのように全部コールドで勝ち、東日本もコールドではないですけれども一応5連覇いたしましたその3週間後のインカレで非常に強い日体大には6-2だったのですけれども、それ以外は全部コールドで勝たせて頂きました。ソフトボールの男子は早稲田と言わしめるぐらいの力をつけてきた瞬間でした。それでエース3人が抜けたわけですが、昨年は大変苦労しました。日本ハムファイターズに行った大嶋という選手の弟がエースを目指したのですけれども、右腕を2回骨折してしまったので彼をサードにコンバートせざるをえなくなつて1年生を急遽作り上げてスタートしました。ピッチャーがいなものですから、やはり秋のリーグ戦は2勝3敗からのスタートで日体大、中央大、国士館大に負けて4位でした。その1ヶ月後の関東大学選手権でも準決勝で東海大ごときに負けています。そしてひと冬越えて、冬場に徹底して1年生ピッチャーを育て上げて、国士館大には1-8でコールド負けはしていますけれども春はようやく準備にこぎついています。まだまだしっかりしたチーム作りができて新1年生のピッチャーも育て始めて、8月の初めの東日本では残念ながら2-5で城西大学に負けてしまい6連覇することができませんでした。格好良く言いますと私が女子の大会の方にいましたので、男子が負けてしまいました。その3週間後のインカレでは1, 3回戦と決勝戦をコールドで勝たせて頂いて3連覇させて頂いたというのが経緯です。

その次の3ページ目をご覧ください。我々が非常に励みになっているのが、早稲田スポーツという素晴らしい新聞が我々のようなマイナースポーツであっても常時3, 4人の学生記者が来てくださって、このような左側の「最強早稲田完全制覇」その下には監督が殿堂入りという小さな記事が学生の新聞なのにこのようなことまで書いてくれています。右側が去年の夏の記事なのですが、「貫き通した早稲田らしさ」その下には「監督が教え語る人を育てるとは」というタイトルで藤川さんという学生の方が書いてくれています。このような早稲田スポーツという非常に面白い広報活動をやっている学生諸君がいるので我々も大きな励みになって競技に打ち込めるということです。4ページ目をご覧ください。これがうちの部の1番の特徴です。同好会から部にかけて文章と写真とで11冊、約4000ページの記録を残しています。1冊200万円ぐらいかかるので11冊だと2200〜2300万円を使って若者の記録を残させて頂いています。そのような学習活動もやらせて頂いているお陰で、卒業生4人のGPAが高かったのではないかと思っています。もう1つこの本は昨年12月に我々50周年のお祝いの会を行った時に、OB達がベースボール・マガジン社の池田哲雄社長の許可を頂きましてソフトボールマガジンの11, 12月号に載った早稲田特集の

記事を使わして頂いて去年のパーティーで配らせてもらったものです。最後のページにはですね、「吉村監督として最も大切なことは人生において勝てる学生を育てるということ」で書いて頂いています。私にはそれは大きなことだろうという風に思っています。三つめの資料は「Hole of Fame」。1年5か月前にここで殿堂入りのパーティーをさせて頂きました。今日は小宮山さんが会場にいらっしゃっていますが、小宮山さんには大変過分なスピーチをして頂いて大変恐縮した次第です。1ページの前には殿堂入りの本文、先ほど仙北谷さんがおっしゃってくれましたが、日本でコーチ、監督という意味ですがその評価、そしてアメリカでの選手としての評価、研究者としての評価、そして4番目が日本式ティーボールを作り野球界の底辺拡大に貢献した評価、3冊ほど英語の冊子を吟味検討して頂いたというものです。それでは資料説明はそれくらいにしてレジュメ始めから話していきたいと思えます。

ソフト部についてですが部員は今言った通りです。施設は所沢の素晴らしい野球場を頂いております。日本一の球場です。早稲田大学当局には本当に感謝しています。広い球場であるため次に申し上げる様々な練習がクリエイティブな形で行える様になっています。補助金としては大学から54万5千円頂いて、強化費として30万頂いています。そして嬉しいことに個人強化費として素晴らしい選手を4人ほど育てているため個人強化費として40万×4、160万頂いております。私も監督として月々2万円頂いております。ありがたいことだと思っております。同好会24年やっている時は「無し」ばかりだったものですから、グラウンドはない、人は集まらない、お金は1円もない。それで24年間つくり育ててきた訳ですから、この様な大学からお金をもらえることは大変ありがたいことだと感謝しています。

そして我が部の目標でありますけれども、それは世界一、世界一です。同好会24年やってきたわけですけども、実は同好会で日本一を取るといのが私の目標でした。残念ながら同好会ではベスト4が1回きりです。やはりグラウンドがない、人が集まらない、金がないでは勝てない。平成元年から部にして頂いてからは、私は目標をガラツと変えた。早稲田の部であるなら目標は「世界一」という風にして、先ほど紹介があった様に、19回部員をアメリカに連れていっています。それ以外にもブラジルに10年間連れて行ったり中国に連れて行ったりしております。まあ去年は男子をシカゴの方に連れていきましたので、1000万ほど使いましたし、女子部は今年の3月ハワイで500万、保護者の方にはご協力を頂いて、学生には練習せよ、勉強せよ、バイトせよと三つしっかりせよと厳しくいつてあります。それがうちの特徴かなと思えます。

二つ目の目標は人間教育と人間形成です。これは徹底してやります。で、先ほどのソフトボールマガジンにある様に人生で成功しなければ意味がない。そういう風にして礼儀作法とかフェアプレイの精神だとか、1年生、2年生、3年生、4年生学生同士の信頼関係、監督と学生の信頼関係、いいチームを作ることによって、マイナースポーツであってもその練習を見たい、試合を見たいということでありピーターを増やしたいというのが我々の考え方で、学生諸君は汗を流して努力してくれているというのが現状です。今までの特徴的な活動となると、この50年でOBが500人を超える様になりました。皆様と同じように様々な分野で活動してくれています。24年間同好会であったものですから全員が一般入試でありますので、それこそ本当にすごい分野で活躍してくれています。特徴的なのは5人の医者を育てたこと、早稲田というのは文系の大学なのですけれども、私は身体活動をやっていると、当然身体の構造と機能を学ぶべきだろうと言ってきました。政経学部から医者になった、社学から医者になった、文学から医者になった、ス

スポーツ科学部から医者になった、人間科学から医者になったのがいます。弁護士が4人かな、パイロットが4人います。それはまあ、みなさんの部とほぼ同じかなと思ったりしています。そこに、大嶋匠ってこう書いておきましたけど、3年前に世間を騒がせて申し訳なかつたのですが、全くの野球の素人をプロ野球に送り込みました。今年3月に一軍のオープン戦で、東京ドームに行きまして、彼のフリーバッティングを見ましたら、40本くらい試合前に打って、10本くらい、130m、120mの飛距離のある打球を打っていました。順調に育っています。今年の1月には、「ソフトボーラー開幕一軍か」なんてこう新聞に書かれて、私も春、けっこうテレビに追いかけていました。いま、ちよつと盲腸で体調を崩しており二軍でも出ておりません。で、ここで言いたいのは、大嶋が早稲田で学んで、いま大谷君が素晴らしくて、大谷君が日ハムに入った時のルームメイトが、教育係が大嶋。これが嬉しい。これが嬉しい。大嶋という人間的に立派な人間を育てておいてよかつたなという風に思っております。次、田邊徳雄と書きました。いま、パリーグで西武ライオンズが首位を走っています。その監督が実は早稲田のOBなのです。で、私のゼミ生です。田邊徳雄と言います。5年前の卒業生。おかわり君、栗山君、秋山君なんかを二軍ですつと指導していきまして、早稲田大学人間科学部の4年間の通信制に学びにきました。素晴らしい立派な人でした。エピソードを言えばキリがないですけど、今日はその話をしに来たのではないので、今はもう徹底して田邊君を応援しています。今年の3月には宮崎キャンプに私行きましてですね、一軍の連中に対して講演をしてきました。ガチ、マジ、真剣、本気って言って、「いいか、プロフェッショナルはプロフェッサーと兄弟関係や。プロフェッションっていうのが専門の仕事なのだ。ジョブというのは単純な仕事。専門職っていうのはプロフェッション。その派生語がプロフェッサーであり、プロフェッショナルなのだ。」という話をして、「君等、アーリーワークだとか夜間練習がすごい練習だと思っているけど、そんなことはない。プロフェッサーなんていうのは、365日研究、実践をしているのだ。朝仕事をして夜中でも仕事をやっているのだ、プロの選手はそこまでして当たり前だ。」というような気合いを入れてきて、開幕5連勝になったわけ。気合いを入れたのが功を奏したかなと。いま首位を走ってくれてですね、非常に嬉しく思っています。皆さん是非、早稲田で監督やっていたのはおそらく、荒川先生だとか、広岡さんだとか、三原さんだとか少ないと思うのです。岡田さんだとか。そこで、田邊さんもそこに加わりましたので、是非とも応援してやってくれたらありがたいなと思います。彼は野球部に行けないので、ソフト部に来てくれました。で、リーダーシップだとか人をどう育てるかというのを、私のゼミで学んでいってくれました。5番目、ソフトボール50年。先ほど仙北谷司会者が紹介してくださったので、こんな感じ。24年間、同好会でやりまして、25年目に部にして頂いて、私は4年間監督やってすぐ辞めました。辞めるのが美学だと思つて。1年目はですね、インカレ行つて、5回コールド負けノーヒットノーランで負けました。まあ、それほどよろかつた。それでも部としてインカレに行つたことが嬉しかった。24年間同好会、着替はトイレですからね。東伏見で練習させて下さいって言つたら、「女子とか男子とか同好会が東伏見なんて使うことないよ」なんて先輩の先生から、言われたことあります。そういう所、まあ、言えばキリがないですけど、それが部になるとガラッと変わりました。1年目1回戦でコールドで負けたのですが、2年目はベスト8。インカレでベスト8まで行つて、3年目はベスト4。東日本は優勝して、優勝したいなと思つたのですが、力不足でベスト4でした。4年目は準優勝。これも優勝させる自信はあつたのですが、ソフトボールってマイナーなものですから、最終日に準々、準決、決勝というのを1日でやらされた。37℃の

丸亀で。翌日台風来るからといって。私は、その時まではピッチャーを1人しか作らなかつたもので、大エースを。小宮山さんみたいな大エースを1人しか作らなかつた。それが、37℃で3試合は放れないですよ。大失敗しました。で、優勝戦、2対3で中京大学に負けてしまつて。もう私は引き時かなと思ひました。丁度、その頃から人間科学部の管理職とか主任を8年ほどやらせて頂いていたものですから、大学の方の仕事が忙しくなつてきたので、総監督ということで1度グラウンドから引きました。12年程、ずっと引いておりました。そこで1つですね、そこに書いておいたのですが2003年3月31日、早稲田大学稲門体育会50年史出版。今日持つてきたのです。負けず嫌いの私がこれはショックだったのです。青木半治先生が発行の代表で相田さん、それから大倉さんが中心になつて作られた稲門体育会50周年誌です。みなさん方の部は、世界で勝つた、メダルを取つた、凄いですよ。ソフト部は、恥ずかしいかな男子がインカレ初出場。女子がインカレ初出場。東日本優勝止まりの写真しかない。凄いののはワールドシリーズ5位だけですから。私ちよつと真っ青になりました。これじゃだめだ、他の部に対して、早稲田の体育会として恥ずかしいと思つて。12年前です。学部の管理職も終わりの方に近づいてたので、グラウンドに戻らさしてもらおうと思ひました。60歳でグラウンドに戻りました。それで60歳から今年70歳ですけども、この10年間で先ほどの資料のような成績を残させていただきました。まあこれが本当に私共ソフト部、私にとつて本当にインパクトの強い10年間であり、こういうような例を上げさせてもらいました。あと30分ですけどもそれで本題の10年間でインカレの5回優勝してこの3年間、男子3連覇、女子は実はこの3年間、1点差で負けたところが全部インカレ優勝したのです。早めに女子が負けてくれたおかげと言つたら女子に悪いのですが、私が男子の方に行つてやつて、男子がコールドで勝つたという事になりました。今年は何が何でも女子をインカレで優勝させてやろうかなと思つています。そうすると、今年男子を見られない。足元救われて4連覇できないかなと思つたりもしていますけど。そんな感じで監督を務めさせてもらえています。

それでは、私の指導法と実践的指導法、投手の指導をご覧ください。ピッチャーにはとにかく全部三振とれ。三振全部取つていれば、ソフトボールや野球は負けることはない。全部三振取れ。と言つています。そして三振を取れなかつたら、打たれないボールを投げろ。打たなければ負けることはない。そして変化球は100種類以上。200種類300種類投げられる。それを教えます。3つ目。じゃあ、その打たれないボールを投げられないつてなつたらどうするか。一度の投球で3つの変化をする球を投げろ。これは、卓球のサーブやテニスのサーブ、バレーのサーブなんかと似ているのかもしれない。一度の投球で3つの変化をつける。どういうことかと言うと、ソフトボール125キロともの凄く速いです。125キロ投げて、ライズして、カーブさせる。次は、5キロ遅くして120キロで、落として、シュートさせる。そして次、落とすボールは少し遅い方が効果的であるから、110キロ前後で投げて、落としてしまえ。で、もう一つ。チェンジオブペース。チェンジアップは、90キロくらいで、パームの状態、ナックルの状態でパツて落としてしまえ。お分かりですよ。ライズ。ドロップ。高低の差があります。で、スライダ―、シュート左右の変化があります。それから、スピードの変化。前後の差があります。バッターはどれを打つていいかわからないです。だから、ど真ん中放つたつて打てない。そういうボールを私は要求します。そしてキャッチャーの後ろで一球一球丁寧に指導します。「よし」、「なんやそれ」つて平気で言います。一度の投球で3つの変化をさせるというのが私の理論です。4番目。それが出来なかつたら、へボだった

ら、バッターの目から遠い位置に投げる。こうバッターが構えます。バッターから遠い位置というのは、アウトコース低めです。で、アウトコース低めに投げる、アウトコース低めで落とせ。アウトコースの低めでカーブさせろ、変化させろ。アウトコースでストリートだったら打ちますよ。バッターに2割5分打たれる。でも、そこで変化させれば1割くらいで抑えられる。それをやります。それで、インコースの低めもやる。右も左も立つからアウトコースの低め、インコースの低めにも投げられるようにする。目から遠いところに落とせ。目に近い場所であればパチンツと打たれてしまうからそれはやめろ。その様な指導をします。そして、5番目。配球を考える。下、下、下っていうように3つ続けて投げるとバッターは下のイメージになる。それが、ヘボのピッチャーは、2ストライクとつたら高めに振り球を放ります。バーンと。こんなもん手も足も出ないから、無駄球です。疲れるだけなのです。下、下、下にばかりに意識が向いていたら、もうこのへんのストライクゾーンの高めでちよつとアウトコースはずしといたら、それがつり球になる。こういう配球を徹底して教えます。逆にソフトボールでは、ただ高めが非常に怖いものから、1発ボールと打たれたらそれで負けますから。0点で抑えるようにする。特にアメリカに行くときは、メジャーリーガーが9人くらいダツツといるわけですから、それがソフトボールしてくるわけですから、その連中にとにかく低め低め低めで緩急に差をつけるということをやらしています。

次に、打者への指導ですが、もう簡単です。全部ホームランを打て。全部ホームランを打て。ホームラン打ったら勝ちます。じゃあ、ホームランを打つにはどうしたらいいか。原理は投球の運動量が打撃の運動量に勝れば良い。投球の運動量ってなんや。ボールの重さ×速さです。重さ×速さ。だから、野球で160キロ投げている人は、ボールの運動量が非常にあるわけですね。で、それをバーンと打とうと思ったら、重たいバットで速く振れば真芯で当たれば遠くに飛ぶ。でも、ソフトボールで使うバットは軽くて細いです。そしたら、ソフトボールはですね、今日持ってきたのですけど、こんなにでっかいのです。こんな痛いです。硬式のボールを大きくしたのがソフトボール。みなさん柔らかい軟弱だと思っっていますが、とんでもない。こんなのが当たったら死んでしまいます。だから、ヘルメットもつけますし、カップもつけますし、エルボーガードもつけます。で、近いところからバーンと120キロくらいで放ってくるわけですから、体感スピードが150キロくらいに見えるわけですから、ものすごく怖い。危険極まりないボール。で、それをどう打ち返すか。打球の運動量はバットの重さ×速さです。細いバットでどう打ち返すか。どうするのだ。そうなるともう脇を絞らざるをえない。こう。天才的な良いバッターは別として、浪人が半分くらいいるようなチームですよ。で、ソフトボールやるのは、もうだいたい下手ですよ。野球選手から見れば。野球部とか準硬式野球部をいくと、もうよだれがでるほど欲しいような選手がいっぱいいますよね。それくらい下手です。で、どうするかといったら、脇を絞って、全部アウトコースを狙って、右バッターは右中間にホームランを打て。腰からぐつといかないと遠くに飛ばない。こんなバッティングでは飛ばないのです。ですから左バッターは、左中間にホームランを打て。右バッターは右中間。全部アウトコースに山を張れ。そこでインコースがきたら、クルつといけて。クルつと。怖いからいちやうわけです。ヘボは、ごめんなさい。下手なのは、真ん中とか、インコースに山を張っているのです。そして、アウトコースは絶対打てない。だからなんとしても常にアウトコースを張る。そして近くにきたのはクルつと回る。腰いれて打つ。こういう打ち方を徹底してやらせています。そして、2番目も同じように投手の打たれたくないボールを打て。打たれたくないボールを投げてくる。そういうピッチャーを育てて

いるわけですから、それを打つ。だから、まさに実践なのです。だからこう死んだ打ち易いボールを打ってどうすんだ。と私は平気で言います。そんなボールをパカーン、90mパカーンって打ったって意味がない。まあ下手な選手、下手な選手はそうやってフォームを固めていくのはいいけども、それは実戦ではない。向こうも打たれないようにと思って投げてるのだから、それをどう打つかが実戦だ。というように言っています。で、そこで競争させます。3番目。1人で点が取れない。1人で点が取れないのだったら、ホームランが打てないのだったら、2人で2塁打打っちゃえ、3塁打を打っちゃえ。エラーで出たら、その後、盗塁してワンヒットで還っちゃえ。だからそこに連携プレーが生まれてくのだ。連携プレーの重さをそこで私は教えています。4番5番の強打組、小技組。バントして強打して、ソフトボールというのは非常にバントが決まるのですね。だから、サードとかファーストはずっと前にくるのです。そこで私は、前に来たら強打せよ、前に来たやつの前にバントしたってアウトになるだろ。そのバント処理をするために、サードやファーストは守っているわけだから。そこにバントするバカが、ごめんなさい。監督用語になっちゃうわけです。すいません。そんなことあるか。ということ言うわけです。それで前に来たら強く打て。だから当然6割6分7厘。7割は打てるわけです。2年前のうちの2番バッターの太田というのは、8割ちよつと打ちました。インカレです。大会史上最高打率です。そういうように打てるので、3回とか4回、5回で10数対0で勝てるわけです。今年も春の男子一部リーグ戦はですね、うちのキャプテン溝口が6割6分7厘で首位打者となりました。強打組は右バッターの強打だと、当然バントがないからと、後ろに守りますよね。後ろに守ったやつを抜くのは難しい。前に守ってくるやつは守備範囲が狭いですから、そこを抜くのはやさしいです。そこで4番バッターがそこでバントするわけにいきませんから、強打するとやっぱり3割5分ぐらいしか打てない。で、それはそれでいいのだと。で、それをどういう風な練習をしているかという点、先ほどですよ。早稲田大学は野球場の大きさのところで、ソフトボール部は練習させてもらっている。ですから3面でバッティングをする、2面でエースピッチャーが打たれたくないボールを投げる。それを、打たれたくないボールをバッターはどう打つか。そこで競争をする。お解りですよ、ピッチャーとバッターの戦いがそこにある。もう一方もピッチャーとバッターの戦いがある。それを記録すればもつと戦いが厳しくなる。もう一つはピッチャーとピッチャーの競争。打率をだしますから、バッターとバッターの競争がある。練習で徹底して競争させないと学生は伸びない。もう一箇所はどうするかというと、マシン。アウトコースにバンバン、ボールを速く放らして、グーッと引きつけてできるだけ遠くにボールを飛ばす練習をさせます。プロに入った大嶋はこのソフトボールを98mくらい打ちました。野球にすると130mぐらいの距離ですかね。パンパン打てるわけです。そういうような練習をさせていただいております。

そして野手への指導はですね、キャッチングで大事なものはなんや、と私はすぐ学生に聞くのです。両手で捕ること、正面で捕ること。そのとおり。おもむろに私は言うのです。キャッチングで一番大事なのはな、捕るこつちや。どんなボールでも捕れ、捕ってしまえ。実戦はそうなのです、どんなボールがきても捕らなきゃだめなのです。ショート、サードはバッターランナーを一塁でアウトにさせる確率が高い選手がサードのレギュラーなり、ショート、サードのレギュラーである、ということですよ。そういうような指導をしています。ただ、試合前のノックのときは、やはり日本人ですから形は大事ですね。やはり非常に大事なのです。スーッとボールがグラブに吸い込まれるようなかたちで。まあ儀式ですから。チームがブワーツ

と盛り上がっていくようなそういう環境をつくりなさいと。なかなかできませんよ。もともと下手な人を集めているわけですから。そういうような環境を作らせて、実戦ではいかに勝つか、というようにしております。次、連係プレーとチームプレー、打順というようにメモしていますが、そのまゝに左利き。実はですね、一週間前に左利きの学生が、先生僕ピッチャーかファーストか外野かだけしかプレーできないのですよ、と言ってくるから。いや、なにをいうとるんや。私の理論がわからないのか。キャッチャーいきなさい。キャッチャーだって左にとつて大変メリットがあるやないか、左で。今は左バッターが多い。左でこう投げたら邪魔をする人はいない。野球と違ってソフトボールはリードできないから。別にそのランナーのリードを見る必要もない。また、バントが多い。野球のバントよりソフトボールのバントが多いから、そのバントを捕って一塁に放るのは左のほうがずっと有利じゃないか。右よりも左のほうがキャッチャーは有利じゃないか。なんでキャッチャーにトライしないのだ。トライさせています。良いキャッチャーに育っています。なんでショートやらないのだ、なんでサードやらないのだとも言います。概念を崩すというのは大学教員の仕事です。先ほども言いましたように、左でショートを守ります、捕ってバッターランナーをアウトにすれば右だろうが左だろうが構わない。例えばですよ、左だと三遊間をたくさん追えるわけです。そうすると守備位置は二塁ベースに近くなるから、向こうのランナーが一塁にいたならば、離塁・盗塁がしにくいですよ。そういうメリットだってある。メリットを考えると、ということですよ。で、最終的には右のショートに負けるでしょう。負けたところで左の人がファーストにいったときに、ショートの心、サードの気持等がわかるから。難しいボールをパーンとしっかり捕ってくれますよ。そういうようにして内野の連係を上手にする。また、外野と内野の連係なんかは、うちはエリートばかりいないので肩の弱いやつもいるわけですよ。外野に飛んだら、型どおり動くのですよ、中継は真ん中らへんにショートのやらセカンドやらが入ってしまう。そんな馬鹿な話はないじゃないか。肩の弱い人が外野を守ったなら、肩の強い内野手が外野より入ってやって、短い距離では早くボールとつて、肩が強い人間がバックホームをすればよろしい。こんなの当たり前やん、小学生でも知っているよ。でもそういう連係が今の学生はわからないのです。なんのためのキャッチボールやっているのだと。相手がどれだけ投げられるかを正しく理解して捕れるボール、捕らせるボールを放らないと意味がない。それがキャッチボールの基本なのです。それがわかっていない。そんなことも教えたりしています。それから、連係プレー、チームプレーに入りますけど、我々は試合ではダブルクリンアップ制をとっています。1番2番が7割8割打ってくれる、4番5番がバチーンと打ってくれる。そこで3点4点とつてピッチャーが抑えてくれれば勝つ。初回で勝ちます。それがだめでも、5番6番が7割から6割くらい打ってくれて、7番8番に強打者をおいてピシッと打ってくれる。どんなイニングであっても点が取れるようなことです。でも取れないときも多いです。いわゆるダブルクリンアップ制というのをとっています。

最後に、試合前の投手と打者の心得なのですけども、これは今トライ中です。試合前に私は打撃練習を行わせない。打者をハングリーの状態にさせるのです。よくやってトスバッティング。試合前に打ち易いボールを90 m、80 m、バーンバーンと遠くに打ってもらっても困るのですよ。ご存じの通り実戦というのはピッチャーが打ちにくいボールを放ってくるわけだから試合前にこんなのを10球も20球も打つてもなんの役にも立たない。と私は考えるのです。飢えの状態を作る、ハングリーにさせる、そうするとゲーム前にキャッチボール、守備練習をしているときに向こうのピッチャーがピッチング練習をやっているの

を、それを見る。どういふことかと言ったら、今までのデータと同じかな、落とすボールかなライザーかな、チェンジオブペースはどのくらい威力があるかなというのをチラチラと見る、でイメージさせて素振りさせておく、で飢えの状態を作らせておいてどのボールで勝負するか。というのを今実践しています。これ3年間で大きな大会で試合前にバッティング練習を1回もやらせたことがないのです。

で反対にピッチャーはですね、とにかく初回までに3回か4回ぐらい放らせたような感じ、もう80球からで100球くらい放らせることもあります。私はずっと見ていて「打たれる」、「このボール打たれる」、「このボール打たれない」打たれないボールを引き出すまで私は結構アドバイスします、ゲーム前に。でソフトボールというのは嬉しいことにリエントリー制というものがあって、ダメだったらサツと換えて次に違うピッチャーにして、またスターティングメンバーにもう一度戻せるというような制度があるのです。それをふんだんに使います。打たれないボールをきちんと放れるようになって行かせます、だから、ゲームの前に、おい、向こうの1番バッターでキャッチャーにサインを出すシュート、ドロップ、ムービングファーストボール、ドロップ、ムービングファーストボール、シュートとかというような配球で放らせます。配球をここでキャッチャーとチェックします。よし、これでいけると。そして初回をとにかく0点で抑える、相手チームは初回に点をいれようとしてスターティングメンバーを組んでくる、それを抑えてしまえば早稲田の勝ちなのだと思っただけです。初回にうちが点を取ってしまえば勝つ。そのような感じをやっています。

あと、次はあんまりこれをやると2時間も、3時間も1か月も長くやってしまうのですが、次に行かせて頂いて。一般的な指導法というのをちよつと書いておきました。それはですね、私は20年位前から日本体育協会の指導者A級、B級資格認定講習会の中でスポーツ指導論の担当教官だった、だからサッカーの指導者、ラグビーの指導者、その他の指導者、野球の人だけこなかったですけども10年間私は指導をさせてもらったんですけど。そこで使っていた資料なのですが、私は医学部にも10年ほどいたものですから、あまり医学は好きではなかつたですけども、でその時にソフトボールの専門家として看護師さんなどの、看護管理である人たちにアドバイスをしてくれないかということで、書いた小見出しをここで紹介したいと思います。あと10分、15分かな。簡単に説明していきます。まず、最初は「ソフトボールを心底好きになる」ことです。これを、看護師さんなんかには、看護技術を徹底して好きになりなさい、体育協会で指導するときにはサッカーとかバスケットボールとか皆さんが専門とする競技を心底好きになることである、そのためには人、モノ、技これを徹底して愛しましょう。人だったら、レギュラー選手だけでなく補欠、一年生、監督さん、向こうのチームの選手、審判員、評論家、観衆、とにかくそこに来てくださる方を徹底して好きになつた方がいいよというアドバイスをしました。自分の得意分野の中で技というものが確実に上がつていったならば、その種目というものは確実に好きになります。技が上がつていかなければなりませんが、俺は限界なのではないのかとなつてしまつて成長しません。技は磨くようにしていかなければなりません。2つ目、「選手をよく知り、信頼しあふこと」。選手、身長とか体重とか筋力とか個人カルテを作れと、それで、1週間後、1か月後、筋力がこうやつて太くなつた、柔軟性が上がったですね、脚力が伸びた、こういったのを褒めてやると。身体的特性的なコンディション、そういうものを監督というものはしっかり知つておかなければならない。選手の癖とか形態模写、物まねができるくらいその選手を凝視してやる必要があります。3つ目は、先ほどとダブリますがけれども「施設を大切にすること」。土の質はど

うなのか、太陽の位置はどうか、風向きはどうか、グラウンドの様式はどうか、それから用具も手の延長でピカピカにしているか、大事に持っているか、イチローさんを見てみるよ、というように有名選手の名前なんかを挙げて説明したりしています。4番目、「ソフトボールを好きで上手であると、上手になろうとすること」。看護技術が好きであること、上手になろうとすることは看護師さんが必要なことだと言いました。ソフトボールが上手いと指導する側として随分得をします。でも、それほど上手くなくても上手になろうとしている人を学生が見たら間違いないくらいそれは良い指導になります。だから、監督さんとコーチは、やっぱりウインドミルが出来なくても自分でウインドミルを用いると、努力してやっている、学生は見ていますから、学生は育っていくと私は考えています。5番目、「チームの目標と特徴を把握すること」。先ほども言いましたように、早稲田は世界一、だからアメリカ遠征、ブラジルも行き、そして全国制覇。私は、以前女子の同好会をずっと持っていてですね、それは大変でした。中学校の先生たち同じで、捕る喜びを教える、捕らして喜びを与える、打って一塁でパツと立ってニコツとする喜びを引き出す、こういう指導も20年ぐらい女子の同好会を創って育てたときにやらせて頂きました。ただ、そういうチームだと潰さないためにそれぞれの技術習得で喜びを与えること。私はこういうこと言いました。この同好会では、「人数で勝て」25人ぐらい同好会員がいればいいじゃないか。「笑顔で勝て」25人が笑ったらいいチームだと思いませんか。「ついでに得点でも勝ったら？」というような感じで同好会育ていって、今の女子部があります。今年の春の女子部はですね、3月にハワイ遠征に行ったおかげもありますけれど、去年の冬ぐらいから男子の練習と同じ練習をやれ、と言って素晴らしいピッチャーを3人育てておいたのです。結論言うと春の一部リーグ全勝しました。日体大、東京女子体育大、日本女子体育大、国士舘大、東京富士大と体育とソフトボールが凄いいところばかりなのです。ウチの連中はちょっと3段階くらい体力、技術、経験等が落ちるのですけれども、6-0とか6-2とか大体6点くらい取るようなチームになりました。その部の前身である、同好会で20年くらい苦労した時には、先ほど述べた3つの目標を持ってチームを潰さないようにして来ました。6番目、今の指導とかぶるのですけれども、「指導法は柔軟性を持つこと」、与えられたグラウンドが広いのか狭いのか、与えられた練習時間は長いのか短いのか、それによって考えます。技術レベルだつてそれによって皆が納得する練習計画、その日の計画、1週間のプラン、1か月のプラン、3ヶ月のプラン、6ヶ月、1年間、3年後、5年後、そういうのを全て頭に入れて、指導計画を作って、柔軟性を持って、チームワークを大切にしながら作っていくことが大事だぞ、ということと言います。7番目、「しっかり丁寧に教えること」、先ほどもちょっと話しましたけれども、ピッチャーの1球1球を私ずつと見ています。そして、変なボールを投げると「なんやそれ」と平気で言います。暑い中、35℃で私は傘をさし、1日5回くらい日焼け止め塗り、熱中症で2回ほど倒れたことあるのですけども、しっかり「なんやそれ」と言わないと手抜きします。それ程ピッチャーつていうのはしんどい。打者の素振りでも「なんやそのスイング」と言わないと手抜きします。人間つていうのは手抜きします。だから短い時間にしっかりと手抜きしないような練習、それだけの強い負荷を与えた場合、それだけに耐えられる身体を作らせるというのは絶対的に必要なのです。うちの場合はトレーナーもしっかり育てています。あそこに新井元主将がいますが、彼と同期で世界一と日本一とつた時のキャッチャーの子は、今ヤクルトスワローズの一軍のトレーニングコーチです。人間科学部で博士号までとりました。そういう男がソフトボール部では育っていつてくれています。しっかり丁寧に教えること。礼儀作法であったり、

言葉遣いであったり、そういうことを教えています。8番目、「情熱と優しさを大切にすること」。私は昔から情熱しかなかった人間です。徹底して、誰よりも汗をかいてグラウンドに出る。今は教授という職を頂いていますけれども、週4回はグラウンドに出る。土日、朝は女子を指導して午後は男子を指導する。1日練習はやらせない。時間を大切にしない。もったいない。勉強しろ、本を読め、バイトをやれ、と言います。だから、私も朝2時間指導して、研究室で書き物などをして、涼しくなった3時半か4時頃から6時くらいまでグラウンドへ行って男子を見る。火曜日と金曜日でもグラウンドに出るようにしています。9番目、「選手の扱いは公平にすること」。これは守りたいと思っております。ただ、言葉掛けに関してはどうしても4年生のほうが多くなります。私の代理を務めるのはキャプテンだから。キャプテン、副キャプテン、主務と話すことが非常に多いです。1、2年生が私に語ることは非常に少ない。もう少しトレーニングして、しっかり成長してから私の方に近づいてきなさいというメッセージは残しています。まあ、こういう指導をしています。次、「褒めること、叱るときは冷静であること」。徹底的に褒めます。私が平安高校で毎日殴られて野球をやっていた頃は追いつけ追い越せの時代だから、なんでこんなに殴られるのか、バットで叩かれるのか、なんでグリップエンドで頭を叩かれて、毛が伸びないのだろうかということを考えていましたけども、今は違う。これだけ経済、政治が安定してくると、やはり褒めなければ学生はついてこないし辞めていきます。また先生が褒めているというふうに思われたときは、「日本大の監督がこうやって褒めていたぞ」というふうに相手の監督が褒めていたことを言っていると、また嬉しい気持ちになっっているはずだというふうに思っています。次、「叱るときは冷静であること」。私が叱るときは3歩くらい引きます。そして10くらいひのり方の引き出しを用意しておいて、この場面は3かな、7かなというような感じ。そして明日、彼に会うかな、彼女に会うかなと考えます。明日会うとすれば明日カバーできます。フォローできます。さっき言ったように週4回しかグラウンドにでなかったら、火曜日にかなりきつくアドバイスすると、水木グラウンドにでない間に誤解されてしまう。土曜日にかなりきつく引いても、日曜日は必ず私は顔を出しますからそれは構わない。だから、曜日、時間など環境によってどの引き出しのレベルで叱る言葉を出してくるかなということを考えたりしています。11番目、「必要に応じてコーチを起用する」。コーチもよくやってくれています。早稲田のOBというのは、だいたいその企業で超エリートコースを歩んでいて、なかなかグラウンドに出ることができないのです。ちよつと時間があつたら日曜日に来てくれたり、大会に顔を出してくれたりしています。でもほとんど私が一人で男子も女子も指導させて頂いています。最後、これは日本体育協会でも言いたかったのですが、実績を上げたら、謙虚になること。「実るほど頭をたれる稲穂かな」。私は早稲田マンです。結果を出す。結果を出したら監督って嬉しいのですよ。観衆とかお父さんお母さんのほうに歩み寄りたくてしょうがないんですよ。そこで深々とお礼を言いたくて仕方なくなります。私は3年間優勝していますので、非常に楽しいお礼をずつとさせて頂いています。これが負けたときはなかなか謙虚になれない。ですから皆さんのチーム、ぜひ勝って、思い切り謙虚になっていただきたいと思っています。

最後の最後に、将来に向けてであります。インカレ男女W優勝、これは軽い目標です。2つ目の、世界の子供たちから汗と笑顔をとる活動を、私は41年間やっているのです。早稲田の体育局に奉職させてもらったのが昭和50年、今年で41年目なのです。早稲田の教員をやらしてもらって。その専門が、健康教育、健康福祉マネジメント、ソフトボールでありましたから、健康と教育とソフトボールを合体して、とにか

く世界の子供から、野球型のボールゲームで笑顔を取りたいな、というので、実は日本式ティーボールというものを23年前に作り上げました。これは野球部のOBの岩浪先輩、荒川先生、谷沢さん、末次さん、小宮山さん、準硬の横井さん等いろんな人の英知を頂戴して作り上げました。今はどうなっているかという、4年前から小学校3、4、5、6年生の必修授業に入れました。用具を用具で打つ授業はこれしかないのです、小学校で。こういうことかという、バッティングティーにボールをのせてそれを打つというボールゲームです。こういうバッティングティーがあつて、ここにボールをのせて打ってしまうというボールゲームです。これを、日本式ティーボールをアジアにそして世界に私は普及させたいと考えています。これが普及すると用具を用具で打つゲーム、野球、ソフトボール、クリケット、ゴルフ、ラウンドアス、ホッケー、アイスホッケー、片手で打つとすればテニス、バドミントン、卓球、球技の多くのスタート競技になる。それらの基本の動作を行うのが小学校ではティーボールしかないのです。これを世界に普及させていきたいと思っております。そして、みなさんにお見せするために今日はこんなものをもってきました。これはアメリカの警察署からもらったもので、ここにボールをのせます。このような世界運動をしています。このようなコーンは世界に何千万本、何億本とあります。缶があつたら缶蹴りをします。石があつたら石蹴りをします。サッカーは本場に素晴らしいですよ。本場にすごい。しかし我々はこのコーンの上にとこのようにボールがのつたら何かの棒で打ちたくありません。ここから生まれたのが野球であります。だから、世界にはこういうものがある。ここにボールをのせる、こういったものを早稲田から発信してきたい、そして打たすと。2024年に開催されるオリンピックはアメリカで開催される運動をやりたいなどというのが私の願いです。2016年ブラジルでやるうという動きを私は結構やっただけですけれども空振りでもありませんでした。東京オリンピックはおそらく野球、ソフトボールは戻るでしょう。その後は2024年アメリカですけれどもボストンかパリです。ボストンであれば先程も言いましたように野球、ソフトボールはアメリカの国技ですから黙っていてもやるでしょう。今は2015年です。そうすると2024年に決まったら10年間余裕があるわけです。私達野球やソフトボールを愛するものからすると、その10年間にこのコーンの上にボールをのせる世界的なムーブメントを起こすようになるか。今、世界の野球ソフトボール連盟の調べではソフトボールが加盟しているのは124カ国。野球が加盟しているのは128カ国。20年前私がアトランタオリンピックの時にソフトボールを入れようとしたときとさほど変わらない。これを150から200の国々でやってももらえるようにしていきたい。そうすると2028年、2032年野球、ソフトボールはオリンピックに残り続けるだろうと私は思っております。このような早稲田大学の壮大な活動の中心が、早稲田大学稲門体育会・野球部であったり、準硬式野球部OBのみなさんであったり、そこに我々早稲田大学ソフトボール部であったりすると嬉しいなと思っております。この活動をしつかり行うことが2013年、NAFAで殿堂入りさせてもらった私の行うべき使命かなと思つたりしています。

ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

(仙北谷さん) ありがとうございます。それではもう一度吉村さんに拍手で。

(拍手)